

U WAKO_{no.01}

特集

目と足で社会をつかもう 多様な世界への誘い

U学科では国内や国外のさまざまな地域に直接足を運び、現場で学習するプログラムを毎年実施しています。教室での学びに加え、体験を通じたもうひとつの学問にふれることで、より深く〈現代社会〉を知ることができるでしょう。まだ行ったことのないあなた、フィールドワークの世界を、ちょっとのぞいてみませんか。

目次

- U学科の特色—さまざまな〈現場〉での体験から学習する ②
- 対馬・熊本で〈多文化共生〉を旅する—対馬、熊本フィールドワーク ③
- 生産者と消費者、都市と農村をつなぐ産消提携—庄内フィールドワーク ④
- モンゴルを、そしてモンゴルから考える—モンゴル国フィールドワーク ⑤
- フィリピンを歩く、語る—フィリピン・フィールドワーク ⑥
- 多様な現場の体験で学ぶ—インターンシップと短期語学留学 ⑧

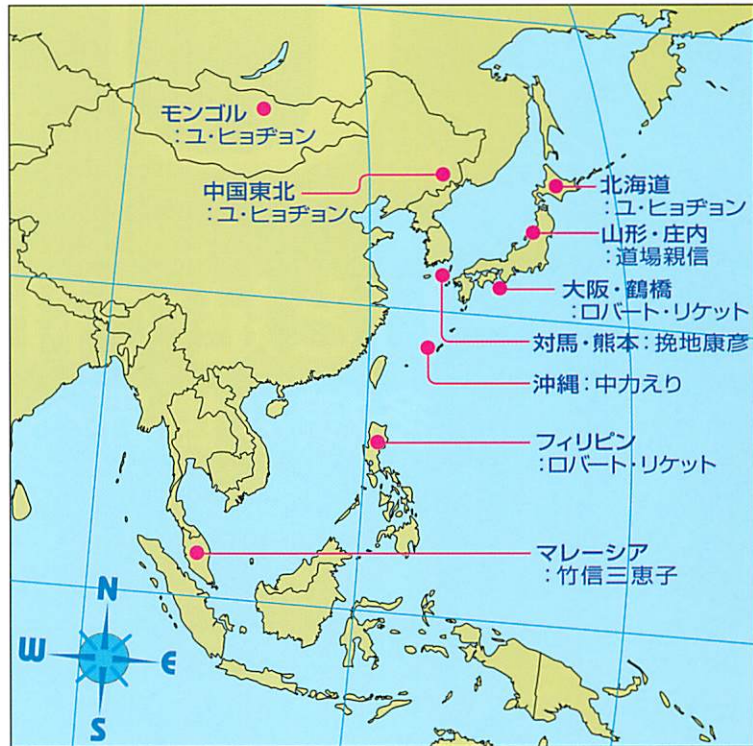
さまざまな〈現場〉での体験から学習する

U学科の特色

U学科(現代社会学科)では、フィールドワーク(現場調査・体験学習)がカリキュラムのなかで重視されています。

行き先はさまざまです(地図参照)。国内外の「現場」で学生と教員がともに歩き、ともに地元の人びとと交流し、学びます。受講生が、教室で教わったことを自らの目と足で確かめ、日本社会で自明・あたりまえ、とされていることを見つめ直します。異文化との接触からくるさまざまな刺激、戸惑い、価値観の揺さぶりは、各自の日常世界を相対化する効果をもたらし、自他の文化への理解を大きく深化させます。一方、「調査する側・される側」という非対称的関係のなかで、単に「異文化」を消費することに終わらせないために、ふりかえり作業を通じてフィールドワークという行為自体を批判的に捉えることも重要です。

ふりかえり学習はフィールドワークが終わっても続きます。和光大学で毎年開催されるアジアフェスタへの参加(異文化イベント、報告会、各国の屋台料理)、フィールドのテーマと関連ある科目の履修、さらには卒業論文テーマの選択などもその延長線にあります。フィールドワークに協力したNGO・NPOでのインターンシップ(事務所などでの短期研修)、ボランティア活動もふりかえり学習を広めます。卒業後は、進路選択(NGO・NPOなどへの就職)、参加した学生のOG・OBネットワークづくりなどを通じて、出会った者同士の交流が続きます。



現代社会学科 各教員の専攻分野

ユ・ヒョチョン：民族関係論、政治学、東・北アジア近現代史

道場親信：日本社会科学史、社会運動論

ロバート・リケット：社会人類学、異文化関係論

挽地康彦：福祉社会学、移民研究、文化研究

中カえり：言語社会学、国際社会学

竹信三恵子：労働と貧困の社会学、マス・メディア論、ジェンダー研究

米田幸弘：社会意識論、社会階層論、計量社会学

杉浦郁子：ジェンダー/セクシュアリティ研究、

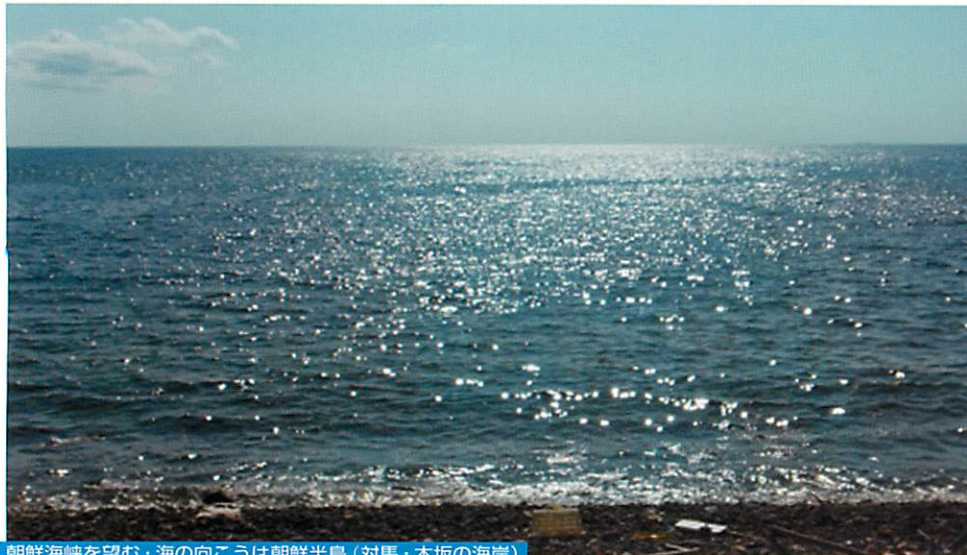
対馬・熊本で〈多文化共生〉を旅する

対馬、熊本フィールドワーク

担当：挽地康彦 場所：対馬・熊本

期間：2011年9月5日～10日 参加者：6名

目的：地域性の観点から「多文化共生」の現状を考える



朝鮮海峡を望む・海の向こうは朝鮮半島(対馬・木坂の海岸)



対馬に流れ着いた漂流ゴミ(木坂の海岸)



晴れた日は
釜山の街並みが望める
「韓国展望所」(上対馬)



「ツシヤママネコ
飛び出し注意!!」
対馬ならではの標識
(北部の山道)



対馬を背にしなから
フェリーで玄界灘を渡る



熊本学園大学・東亜大学・和光大学の
3大学合同ワークショップと参加者たち(熊本学園大学にて)



対馬における国際交流の重鎮・橘厚志さん
を囲んで(対馬西山寺にて)

「薄れる国境」を実感

金槿泰：

九州の福岡よりも韓国の釜山に近い「国境の島」対馬。対馬といえば、韓国ではよく知られた島であるが、日本では訪れる観光客も少なくそれほど馴染みがないようだ。

日程初日の9月5日、フェリーで対馬へ向かうため博多埠頭に集合。4時間40分におよぶ航海の末、対馬(厳原)に到着。さっそく厳原市の元助役で対馬の国際交流に力を注いでこられた橘厚志さんから話をうかがい、6日～7日にかけて島を縦断しながら調査を行なった。

訪問前までの対馬は韓国人観光客であふれる島という印象だったが、この時期の韓国は連休中であつたにもかかわらず韓国人観光客はほとんど見えない。ただ厳原の街中はやはり韓国語併記の看板が多く、島の北端にある「韓国展望所」では、携帯のキャリアが自動的に韓国の通信会社に繋がる奇妙な経験をした。他国にまたがっている島の経済状況を象徴しているようだった。

対馬での日程を終え、8日の午後よりNGOコムスタカの中島真一郎さんから熊本に暮らす外国籍住民の置かれている状況や熊本の多文化共生政策についての講演をうかがい、DV被害の当事者でもあるフィリピン人女性の涙ながらの生々しい話も聞くことができた。そして9日から2日間にわたって、3大学による合同ワークショップが行われた。和光大学からは、NGO活動からみえた多文化共生の課題、親密圏における移住女性の問題、多文化共生の理念をめぐる検討などを報告し、じつに様々な意見交換と貴重な交流ができた。

2011年度の国内フィールドワークとして、九州の対馬と熊本を訪れました。今回の研究テーマは、ローカルティ(地域性)の観点から日本の多文化共生の現状を考えること。

“多文化共生”といっても、何との共生なのかは地域によって異なります。対馬では韓国人観光客や漂流ゴミなど〈流動する外国なるもの〉との共生が問われており、熊本では定住外国人とその生活文化など〈定着する外国なるもの〉との共生が問われているのです。その違いを調べることで、「多文化共生」への具体的な課題が見えてくるんじゃないか。そんな期待も込めて、この二つの地域を選びました。

対馬までの道中は荒れる玄界灘をフェリーで渡るなどして距離感を体感。おかげで船酔いに苦しむ学生も……。ローカルティの意味は移動のなかで味わう身体的な負荷として表れるのです。熊本では、熊本学園大学や東亜大学(韓国・釜山)との合同ワークショップも企画でき、ローカルティへの多様な認識が交錯する場にも恵まれました。(挽地康彦)

生産者と消費者、都市と農村をつなぐ産消提携

庄内フィールドワーク

担当：道場親信 場所：山形県庄内地方
期間：2010年8月1日～7日 参加者：5名



減反田で転作実験について聞く

2010年度は、生産—流通—消費の流れを組みかえて生産者と消費者、都市と農村の新しいつながりを生み出している生活クラブ生協の活動に焦点を当て、協同組合の可能性や日本における食の問題、地域の生存戦略などを学ぶために山形県庄内地方を訪問した。

(道場親信)



遊佐町南西部カントリーエレベーター上で町の農業事情について話を聞く



平牧工房にてソーセージ作りを見学



農業体験に先だって話を聞く

日常に紛れ込んだ“普通”の裏側 望月ブダイ

食のこと、農業のこと、協同組合のこと、人と人との繋がりのこと。庄内フィールドワークは、私の興味のある分野を網羅した内容であった。普段はいたって当たり前のこととして、気にも留めず過ぎ去ってしまうものは誰もあると思う。日常に紛れ込んだ“普通”に思いを巡らすのは簡単ではない。ある物事を捉え、焦点を当て、注視してみると、想像するだけで無数の裏側がある。

和光大学の生協で売っているコッペパン。目にするのは棚に陳列してある姿だ。しかしその前には何かあるのだろうか。棚に陳列する生協のおばさんがいる。生協まで運んでくるトラックの運ちゃんがいる。トラックに運ぶ前にコッペパンは製造工場にいらさう。機械で袋詰めされているかもしれない。ただそこにも手を介す人の姿がある。製造工場の前はもしかすると、コッペパンはコッペパンの姿をしてはいない。その原料はどこで作られているのだろうか。また誰の手によって。

この小さな食べ物の裏側にはこれほど大きな世界が広がっている。一連のフィールドワークを通して、私が目にしてきたものは、このような世界のほんの一部である。しかし、一年間で多くの人に会い、世界というものさう回っているのだと少なからず感じる事ができた。知らないことは想像できない。だから私はいろいろなことを知りたいと思う。そして毎日ではなくても、時々でいいから考えたい。この食べ物はどうやってここまでたどり着いたのだろうか、と。



ただただ枝豆を踏んつけていた……。

同じ目線、違う感覚 長沼 秀

「じゃあ兄ちゃん、ここ乗って。枝豆上から踏んでもらえる？」

たぶんこんな言葉から始まったと思うが、今わたしはそこかしこから次々と収穫機に積まれてくる、安定性のない大量の枝豆を一心不乱に踏みつけていた。農作業体験後半の出来事である。農作業自体は最近めっきり運動から遠い生活を送り続けていたせいもあって、過酷であったと言っても過言ではない。

今わたしは2m程ありそうな収穫機の荷台に乗り、次から次へと運びこまれる枝豆を凝縮させるようにひたすら足で押し込めている。列ごとに等間隔で積まれた枝豆を回収すべく、収穫機は畑の奥へと移動を始める。わたしはまだ荷台に乗っているのに、2トントラック並みの視界がゆっくりと、手すりだけに掴まっているという状況で動きだす。徐々に。着実に。

期待していたわけではないが、そこには特別な景色なんてものは無かった。ただ高さが変わっただけで目の前には来た時から変わらない遊佐の光景。さっきと同じ田園風景。だけど、それでもそこで目に入ってきた景色はその場においてわたししか見ていなくて、他の人は想像するしかないこれを今、わたしは見ていると思えば、ほんの少しだけ自分の中で特別な景色になるのかもしれない。



農作業のあと
長グツを洗う



農作業に疲れて……。

モンゴルを、そしてモンゴルから考える

モンゴル国フィールドワーク

担当：ユ・ヒョチョン 場所：モンゴル国（首都ウランバートルと近郊の草原）
期間：2003年9月13日～27日 参加者：9名



モンゴル教育文化大学の学生たちと

「モンゴルを、そしてモンゴルから考える」。これは14泊15日にもわたって行ったフィールドワークのテーマであるが、ここにはまず「フィールド」として選んだ「モンゴル」を眺め、付き合いつつ、そこにとどまらず、「そこから」もっと広い対象や問題へと目を広げていってほしい、というわたしの願いが込められていた。

それは、「青い空」「白い雲」「馬に乗り、見渡す限りの草原を疾走する少年」、あるいは「日本に親近感を示してくれるアジアのなかでは珍しい国」といった一面的で居心地のよいイメージだけでは決してとらえられないモンゴルの現実に触れ、揺さぶられ、戸惑うなかで、なぜこのようなイメージを抱いていたのかを自ら考えてみてほしいという願いである。

そのためにも、できるだけ多くのものや場面に学生自身が直接触れられるように心がけた。

前半は、首都ウランバートルを拠点として、歴史博物館や自然史博物館などモンゴルの歴史や自然を一目できる施設をはじめ、市場、大学、チベット仏教寺院、市場経済化のなかで当時急増していた、いわゆる「マンホールチルドレン」の居場所やその保護施設、さらには日本人墓地などを訪れ、モンゴルの過去と現在を広く知るようにした。

後半は近郊の草原に出かけ、騎馬トレッキングなどの馴染み教育を受けた後、牧民の家（ゲル）に分宿しながら、乳搾りや馬糞の収集などを手伝い、交流しながらかれらの暮らしや思いに触れるようにした。

草原で暮らした時間を含め日程の大半にモンゴル教育文化大学の学生たちが同行してくれ、若者同士の身近な交流ができた。厳しいスケジュールだったが、みんなにとって貴重な体験だったと思う。

フィールドワークの様子、参加者の感想や各自がテーマを立てて書き上げた論文などは、モンゴル人学生たちの文章とともに176頁におよぶ大部の報告集としてまとめられている。

（ユ・ヒョチョン）



お世話になった家の坊やのコーチで騎乗練習



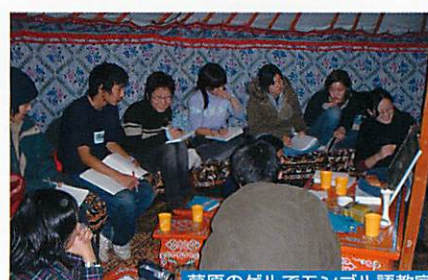
馬具をつける手つきも慣れる！



キャンプ地で燃料集め作業



キャンプ地で羊の解体見習い！！



草原のゲルでモンゴル語教室

Маш их баярлалла.

村上賢祐

モンゴルへ出かけ、見て、聴き、人びとと出会うなかで、わたしの内にあった椎名誠的なモンゴルイメージは、大きく揺さぶられた。モンゴルはそんな簡単なものではないし、明るくて楽しくて気持ちのいいものばかりではないのである。

モンゴルへの関心は、フィールドワークから帰ってきてより強くなった。こうした関心は、後期のモンゴル語講義への積極的(?)な姿勢やモンゴル祭りへの参加(パネルの展示や歌を歌った)、そして報告集作りにもつながったと思う。

しかし、その反面、後悔もある。それは、「モンゴル」についての勉強不足であり、問題意識をもってモンゴルへ行かなかったことである。つまり、フィールドワークとは何かということをしっかり意識していなかったということ。レポートでも深く追究できなかったが、ハルハ・モンゴル人が圧倒的多数を占めるモンゴル国で、カザフ人のような少数民族は「モンゴル人」にどう認識されているのかといった問題も、事前にもっと勉強していれば、より広い視点から深められただろう。「後悔先に立たず」。いや、そんなことではない。この後悔はきっと次の何かにつながり、そして活かされるでしょう！

ユ先生をはじめ、お世話になったみなさんにこの場を借りて、お礼を述べたい。

Маш их баярлалла.

(本当にありがとう!) (報告集より)

フィリピンを歩く、語る

フィリピン・フィールドワーク

担当：ロバート・リケット 場所：フィリピン（ルソン島、ネグロス島、セブ島）
期間：2006年8月7日～8月21日 参加者：6名
目的：フィリピンの多文化・多民族社会と接し、人的交流を通して自文化を相対化する



アメリカンの子どもなどのための支援団体 PREDA で・オロンガボ市



モロ民族地区の少女たち
・マニラ郊外のタグイック市

2006年の夏休み、フィリピンの農民、漁民、イスラーム教徒のモロ民族、ろう者団体、そして「ストリート・チルドレン」と呼ばれている陽気な子どもたちと出逢い、さまざまな交流を行いました。私たちはその出会いを通じて複雑な思いを抱き、「溜め」が保障されている私たちの矛盾を痛感せずにはいられなかったのです。

その出逢いが突きつけるものを、どう整理し、向きあっていけばいいのかは確かに難題です。ですが、参加した6人のうち5人は、保育園、小学校、定時制高校などに就職し、青少年の教育に専念しています。フィリピン・フィールドワークと無縁の進路選択とは思えません。

(ロバート・リケット)

マイ・ドリームが砕いた 私たちの「当たり前」

中原摩実

フィリピンで出逢った子どもたちとの交流のなかで、自分の夢を大きな布にクレヨンで描いてもらいました。「My Dream」の試みは、彼らと「今」を分かちあい、同じ未来へとつながっていきたいとの思いから生まれました。しかし、彼らの夢の数々は、私たちの「当たり前」を打ち壊してくれました。

ルソン島・オロンガボ市で「自分の家族を持って自分の家に住みたい」と、力強く描いてくれた親のない子どもたち。ネグロス島・エスペランサ農園で、「みんなの家に電気や水道がついて、みんなが食べられる米や野菜を栽培したい」と、地主との闘いなど村の現実を小さな胸で、しっかりと受けとめていた子どもたち。セブで、「看護婦さんになって海外の人を助けたい」、「科学者になって自然破壊を食い止めたい」、「アナウンサーになって迷子の名を読み上げて役に立ちたい」と、各々鮮明に希望に満ちて話してくれた子どもたち。

出逢った人びとと私たちとの間に一体何があったのでしょうか。生まれた環境も異なれば、文化も価値観も、何から何まで違う私たちとの間には、「今を生き

ている」こと以外に何もありませんでした。しかし大事なものは、ともに過ごした瞬間を忘れずに、互いに異なった世界にながらも、身近な問題に立ち向かい、共通の未来への夢をあきらめないことでしょ。

子どもたちと笑いあった 空間を胸に

大村麦野

フィリピン社会の現状から大ショックを受けました。出逢った子どもたちに情が移って、別れの度につらい思いをしました。ルソン島・ケソン市のバヤタス地区の「ゴミ山」周辺に広がるスラム街の子どもたち。オロンガボ市のNGO・PREDAの施設に、性虐待を受けて保護された少女たちや刑務所から仮釈放の形で保護された少年たち。家族に捨てられ、メインストリートの橋の下で子どもだけでくらす「ストリート・チルドレン」等々。学校へ通うことを切実に願う子どもたち、ときにはオルターナティブのインフォーマル教育の場で学習する、知的でキラキラした子どもたちの表情も忘れられません。

そして地元の民間支援団体(NGO)の人たちが、権利が奪われた子ども一人ひとりを保護し、救済しようと努力する姿には感銘を受けました。フィリピンの色々な問題を目にし、こうした状況に、一面において加担している日本や他の「先進国」への疑問、私たちの内部矛盾なども感じたものの、なすすべもなく、いま日本の地でくらす私。あのと子どもと一緒に大はしゃぎして笑いあった空間が、確かにありました。彼らと出逢ったからには、子どもの権利など、フィリピンで感じたことを一生のテーマとしてじっくり考えていきたいのです。



セブ島セブ市のバラングイ(コミュニティ)



「国境なき子供たち (KnK)」
フィリピン支部事務所



日本のODAでつくられた大橋
の下のスラム街・セブ市



「マイドリーム」を描く青少年たち・セブ市



橋の下に暮らす孤児たちと・オロンガボ市

言語(しまくとぅば)と伝統文化(エイサー)を通して 沖縄について考える

沖縄フィールドワーク

担当: 中カえり 場所: 沖縄
期間: 2009年9月8日~15日 参加者: 13名



▲「うちなあくち会」との交流



▲「沖縄語普及協議会」のレクチャー



▲エイサー体験



▲沖縄国際大学の学生とエイサー交流



▲沖縄県立博物館で説明を聞く



◀しまくとぅばの日に関する条例制定に尽力した浦崎隆昭議員のインタビューを終えて

関西の異文化にふれあう

関西フィールドワーク

担当: ロバート・リケット 場所: 関西(神戸・大阪・京都)
期間: 2007年9月6日~12日 参加者: 19名



▲キムチ作りに挑戦・大阪市生野区



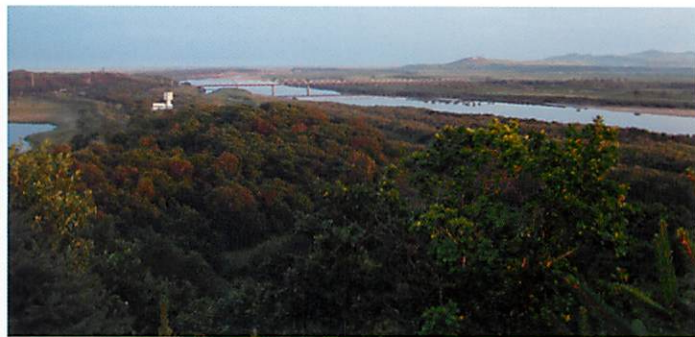
▲コリアタウン入口・大阪市生野区

中国東北の多民族世界の歴史と現在を歩く

中国東北地方フィールドワーク

担当: ユ・ヒョジョン

場所: 中国東北地方(大連、瀋陽、長春、吉林、延辺朝鮮族自治州各地)
期間: 2011年8月30日~9月11日 参加者: 3名



▲中・露・朝三国の国境が交差する豆満江(中国名は図們江)下流。手前が中国、橋の左側がロシア、右側が朝鮮。



▲延辺大学での特別合同授業



▲高句麗時代に築造された吉林の龍潭山山城の山頂で



▲中国と朝鮮の国境の橋、向こうが朝鮮

「植民地としての北海道」を考える

北海道フィールドワーク

担当: ユ・ヒョジョン 場所: 北海道
期間: 2008年9月10日~17日 参加者: 7名



▲「榎本(武揚)公園」で清水先生(アイヌ人)による即席野外講義・江別市



▲酪農学園大のインテリジェント牛舎で



◀特別講義「民族文化を突き抜けた先にあるもの」をしてくれたアナのナリナ、ドンカーンさん(ロシア人)、芸術家、後列左か5人目とパートナーで通訳をしてくれたオノデラ・マリレイさん(ドイツ人)を囲んで

多様な現場を体験して学ぶ

インターンシップと短期語学留学

インターンシップは受講生が主として夏休み中、NGO・NPO（民間の非営利団体）などで約2週間、研修を行ない、「働くこと」と「社会貢献」を味わえる制度です。実習の内容は、宛名書きやパソコンによる書類作成などの事務作業、新聞の切り抜き、統計データの収集などの資料づくり、団体利用者の話し相手、保育園・フリースクールなどでの子どもの世話、図書館のカウンターサービス、イベントの手伝い等々。自分の工夫やアイデアを採用してもらえすることも多いです。

短期語学留学は、全学的外国語科目です。留学先は、和光大学と協定を結んでいる中国の上海大学（中国語）とフィリピン・ネグロス島のラサル大学（英語）や、オーストラリア、カナダ、アメリカ、イギリスなどの募集型の英語学校です。プログラムは夏休み中の一ヵ月間に行ない、修了者は一般外国語科目とは別に4単位を取得できる仕組みです。参加学生の語学力向上はもちろん、たったの一ヵ月間で、自・他の文化に対する意識の変化がはっきりと分かることが、なによりの成果です。

（ロバート・リケット）

インターンシップ

実習先：ピースボートセンターよこはま
期間：2009年9月9日～10月17日（土・日）

ピースボートセンターで 地雷の現状に衝撃

栗谷 泉

ピースボートは世界中を旅しながら、訪問先の人びとと触れあい、協力していくという活動をしています。ボランティアは、ボスターの加工や、これを人の目につきやすいお店や施設に貼ることを通して、ピースボートの活動を宣伝しました。また、土曜日、日曜日には講演会や説明会の準備を手伝い、参加することもできました。

印象に残っているのは、地雷廃絶キャンペーンを行なっている方のお話でした。「地雷は人を殺すのが目的ではなく、苦しめることを目的としています。72カ国に埋まっている地雷は10数カ国の先進国によってつくられています」。その現状を知り、大きな衝撃を受けました。

また、核廃絶運動をしているNGOの講演会では、はじめて被曝された方のお話をうかがい、核の恐ろしさを知り、悲しくなりました。「こんな経験をするのは私たちが最後にしてほしい」というお言葉は心に響きました。ピースボートのスタッフの方々は明るく元気で強い熱意をもって活躍しています。その方たちと会話を交わし、交流することで、得られたことが大きかったです。

短期語学留学

場所：ラサル大学・フィリピン・
ネグロス島バコロド市
期間：2009年8月2日～8月29日
参加者：7名

英語の上達はもちろん、 フィリピン文化も楽しむ

山田奈海

和光大学に入学することを決めた時から、このプログラムに参加しようと思っていました。確かに当初、知らない国で暮らすのは不安でしたが、それはフィリピンに住む人びとの暖かさによって取り除かれていきました。とてもフレンドリーな方が多かったからです。

特にチューター（個人教師）との授業では、毎日一対一で、話したいと思うことができ、英語力が向上しました。一ヵ月という長い期間なので、信頼関係も生まれました。チューターは留学中の強い味方でした。何より、「英語」を学ぶだけではなく、フィリピン文化に触れ、それを知ることができたということも大きかったです。

異文化の中で生活することによって、日本文化の見失いがちな部分を見つめ直すこともできました。このような貴重な体験は、英語力の上達とともに私自身を成長させてくれたと感じました。